

## 忘れ語り、いま語り

## 福島への祈りは可能か

ここでは、再掲載の形ではあるが、小さな媒体に依頼されて寄せたもので、誰に読まれることもなく忘れられていったエッセイなどを掲載してゆく。読まれるべき場所に戻してやりたい、という思いは拭いがたくあった。震災以後の文章ばかりである。以下のエッセイは、『道標』という雑誌に2019年7月に掲載されたものである。

☆

チェルノブイリにはどんな祈りがあったのか。そこで、祈りとはなにものでありえたのか。福島への祈りははたして可能なのか。スベトラーナ・アレクシェービッチの『チェルノブイリの祈り』を読みながら、幾度となく、そんな問いに囚われていることに気づいて、茫然としたことがある。

たとえば、「子どもたちの合唱」と題された章には、こんな祈りの情景が拾われていた。作家は子どもたちから聞き書きをしたらしい。子どもらの眼に映った、チェルノブイリ原発事故の情景、そのひとつである。

まっ黒い雲。ひどい雨でした。水たまりが黄色になった。緑のもあった。絵の具をこぼしたようでした。おばあちゃんがひざまずいてお祈りを唱えていた。「お祈りをするんだよ！ この世の終わりがなんだからね。私らの罪に対して、神さまが罰をくだされたんだよ」。兄は八歳で、私は六歳でした。私たちは、自分たちの罪を思い出してみた。兄は、キイチゴのジャムのびんを割ったこと。私は、母にないしょにしてたことがあったの。新しい洋服を塀にひっかけて破っちゃったこと。タンスにかくしていたんです。

福島でも、事故のあとに雨が降り、ピンクや紫や黄色の水たまりができた、とたしかに聞いたはずだが、あれは幻聴のたぐいであつたのか。ともあれ、この世の終わりの祈りは、なんとも哀しい。わたしたちの罪にたいしてくだされた罰だといわれて、六歳の女の子は、兄や自分が犯した罪をいっしょうけんめいに思い浮かべる。ジャムの瓶を割ってしまった、新しい洋服を破ってしまった……、そんなささやかにすぎる罪がいったい、世界の終わりという巨大な罰に値するものなのか、と問いかけるには、女の子は幼すぎる。罪はみな、大人たちが犯したものだ。人間たちには制御しがたい神の火を創ってしまった、それゆえに神の領分を犯した罪であつたか。子どもたちには引き受けようがない罪だ。

祈りの主役がおばあちゃんであつたのは、むろん偶然ではない。次の聞き書きにも、おばあちゃんが登場する。でっぷり太つたおばあちゃんが、身を揺らして、家や庭にお別れをしているのを、幼い子どもがじっと見つめている。そして、記憶に刻みつけている。

私たちの家にお別れをするとき、おばあちゃんは、お父さんに物置からキビの袋を運びだしてもらって、庭一面にまいた。「神さまの鳥たちに」って。ふるいに卵を集め、中庭にあけた。「うちのネコとイヌに」。サーロも切ってやった。おばあちゃんのぜんぶの袋からタネをふるいおとした。ニンジン、カボチャ、キュウリ、タマネギ、いろんな花のタネ。おばあちゃんは菜園にまいた。「大地で育ておくれ」。そのあと家に向かっておじぎをした。納屋にもおじぎをした。一本一本のリンゴの木をまわりをぐるりとまわって、木におじぎをした。

まるで、ロシアの民話のひと齣みたいな、美しく、敬虔な祈りの光景ではなかつたか。おばあちゃんは二度とここにはもどって来れないことを、たしかに予感している。だから、物置から、キビの袋や、卵や、野菜や花の種をとりだし、生きとし生けるものたちに、家に、納屋に、リンゴの木にお別れのおじぎをしながら播いてゆく。それを、子どもが凝視している。

わたしはここで、宮沢賢治の「狼森と策森、盗森」を思い出さずにはいられない。みちのくの開拓百姓たちが山を越えて、森に囲まれ、きれいな水が流れている野原にやって来る。そして、男たちがてんでに森に呼びかける、ここに畑起してもいいかあ、ここに家建ててもいいかあ、ここで火たいてもいいかあ、すこし木もらってもいいかあ……、すると、森はそのたびに、ようし、とこたえるのだ。民俗学的に翻訳してやれば、木もらい・地もらいの儀礼といったところか。この百姓たちはきっと、岩手山の噴火があつて、開拓のムラを棄てなければいけない状況に追いつめられたならば、チェルノブイリのおばあちゃんと同じように、作物の種やエサを播いて、家や畑や野原、そして森にたいして感謝と別れを告げるにちがいない。

こんな祈りの光景もあつた。

昨日、母は病室にアイコンをかけた。あのかたすみでなにかつぶやきながら、ひざまずいている。みんななんにもいわない。教授も、医者も、看護婦も。ぼくが気づいていないと思っている。もうすぐ死ぬということを感じていないと思っているんです。みんなは知らない。ぼくが、毎晩、飛ぶ練習をしているのを。〈略〉七年生のときに、ぼくは死がなんであるかを知りました。ガルシア＝ロルカの『さけびの暗い根源』を読んでわかつたんです。飛ぶ練習をはじめました。このゲームは好きじゃないけれど、しかたないでしょ？

夜ごと、飛ぶ練習をしている少年はいったい、どこに向けて飛ぼうとしていたのか。すくなくとも、その少年は死がなんであるかを知っている、それがゲームであると諦めている。知らない、気づいていないのは、大人ばかりだ。わたしが被災地で撮つた、たった一枚のひとを被写体とした写真、そのなかには、お地蔵さんのかたわらに立ち尽くし、真っすぐにわたしを見つめている、三歳か、四歳くらいの女の子が写っている。あとで、その子の眼がなんとも言いがたい哀しみを湛えていることに気づいた。そうして祈りの無力さを、子どもだけが知っていて、大人たちが知らないという残酷の前に、ずっと言葉を失ってきた気がする。

福島への祈りは可能か、と呟いてみる。この地に堆積する、透明な残酷に向けて、それでも、いかなる祈りが可能なのか、問いは中空に行き場もなく浮かんでいる。